

荒玉川の洗濯キツネ

昔、天竜川はまだその流れが定まらず、三方原と磐田原の台地の間を自由奔放に流れていました。遠江の国は、川が三方原台地を削った玉石(たまいし)でごろごろとしており、耕作には不向きな荒れた土地になっていました。そのため、台地の下を流れる川は荒玉川と呼ばれていました。

その荒玉川の近くの村に「てん」という6才くらいの女の子が住んでいました。てんは、貧しい農民の子で、父親と母親の3人で限られた狭い畑で作物を育て、細々と暮らしていました。

大雨が続いてやっと晴れたある日の朝、てんは父親と荒玉川に魚を捕りに出かけました。雨が上がると、荒玉川の水が引いたところには、魚がとりのこされた水たまりができるのです。

荒玉川に着くと、岸辺にキツネの親子が倒れているのが見えました。

「こんこん様だ。こりゃあ、オオカミにやられたな。」

「お、子ギツネは生きてるぞ。耳が半分食いちぎられている。オオカミのやつひどいことをする。」

二人は、親ギツネを岸辺の土手に丁寧に埋め、川原に咲いていたすみれの花を供えてやりました。子ギツネは家に連れて帰り、てんが薬草を塗り介抱してやりました。子ギツネはみるみる元気になり、てんにもなついて、一緒に遊ぶようにもなりました。

しかし、ある日、父親はてんにこう言いました。

「こんこん様は神様のお使いだ。いつまでも人間と一緒に暮らすことはできない。山に返しに行くぞ。」

てんは泣く泣く子ギツネと別れることになりました。

それから10年がたちました。てんはやさしく美しい娘に成長していました。しかし、相変わらず家は貧しく、てんの着る物もつぎはぎだらけのみすぼらしいものでした。

ある日、てんは父親と山に山菜を採りに出かけました。その帰り道、てんたちを馬で追い越して駆け抜けていく若者がいました。

「里長のとこの若様だ。立派に成長されたもんだ。」

と父親が言いました。自分は貧しい農民、身分違いなことはわかっていたましたが、てんはそのりりしい若者のことを忘れられなくなりました。

ある天気の良い日、てんは家の近くの小川で洗濯をしていました。自分の着物を見てはため息をついています。先日の若者を思い出すと自分の着物のみすぼらしさに惨めになってくるのです。

そんなてんの様子をじっと見ているものがいました。そして、てんがまたため息をつき、洗濯の手を止めたとき、何者かがさっと飛び出し、てんの着物をくわえて荒玉川の方へ走り去ったのです。それはキツネでした。てんはあわてて追いかけてきました。

キツネは荒玉川の岸辺まで走っていきました。てんがその岸辺に着いたとき、はっとしました。

てんにはその岸辺に見覚えがありました。親子のキツネが倒れていたこと、親ギツネを埋め、すみれの花を供えたこと、耳を食いちぎられた子ギツネを助けたこと、泣く泣くその子ギツネと別れたこと、まるで昨日のことのよう思い出されました。

バシャバシャという水の音でてんは我に返りました。見るとさっきのキツネがすみれの花がいっぱい浮かんでいる水たまりで、てんの着物を踏みつけています。まるで洗濯をしているようです。ときどきキツネが飛び上がると、しぶきとすみれの花びらが飛び散り、日の光に輝きます。その美しさにてんはしばらくうっとり見とれていました。そのうち不思議なことにてんの着物がすみれの色に染まり、美しい着物に変わっていきました。てんは、はっとしました。そのキツネの耳には半分食いちぎられたようなあとがありました。

「おまえは、あの時の子ギツネ。」

キツネはうれしそうにその美しく変わった着物を引き上げてんの足下に置くと、飛び跳ねるように山の方へ帰っていきました。

てんは、その着物に袖を通しました。すみれ色の美しい着物はてんによく似合い、てんをますます美しく見せました。

その時、馬のひづめの音が聞こえました。

「美しい娘さん、あなたの名前は。」

と聞いてきた者がいました。振り向くとあの里長のところの若者です。

「てんと言います。」

二人はたちまち恋におちました。すみれの花咲くこの岸辺で何度も会ううちに二人は結婚することになりました

二人はいつまでも幸せに暮らしました。ときどき「あの洗濯キツネにもう一度会いたい。」と荒玉川の岸辺に行きましたが、二度と会うことはありませんでした。



(イラスト: ふな子)